



野村生涯教育だより

No. 424

(公財)野村生涯教育センターの
シンボルマーク

[n]は、名称「Nomura」と、
基本理念「自然観=Nature」の
頭文字を表している。

発行所

公益財団法人 野村生涯教育センター
東京都渋谷区代々木 1-47-13 〒151-0053

TEL 03-3320-1861 FAX 03-3320-0360

URL www.nomuracenter.or.jp

も
く
じ

- 新型コロナウイルスから
問われる自己教育の課題
- 加速するデジタル化の中で
心の問題を考える



行田市水城公園のホテイアオイ

新型コロナウイルスから 問われる自己教育の課題

四月七日、新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言が政府より発出され、当センターは本部研修会館はじめ研修施設の休館措置をとった。また全国の各支部・連絡所においても勉強会や運営会議等の人が集まつての活動を自粛していった。

四月十六日には宣言の対象区域が全国に拡大され、五月四日には期間が三十一日まで延長された。その後、新規感染者数は減少に転じ、二十五日には全域で解除となった。

金子理事長は、三月二十五日発刊の本紙四二一号の「新型コロナウイルスの課題」の記事で、野村生涯教育の三つのモットーの一つ「社会・人生に触れ合うすべての条件は、自己教育の教材である」に触れ、「人類は今、この新型コロナウイルスに限らず、地球温暖化の課題を持ち、近年は世界中で大規模な自然災害に見舞われていまます。人類全体が、まさに危機に瀕している時代を生きていることを自覚し、生命が生き残り、存続していかなければならない時代を迎えている。そのことを思うとき、人類が今触れている『新型コロナウイルスの出現』を人生に触れ合う条件として、

何を自己教育しなければならぬのか？を真剣に考えなければと思います」と述べている。

またこの間、本部は会員に向けて毎週の指針を出し、通常の活動を控えなければならぬからこそ、野村生涯教育の目的とする、活動を通して触れる事象、生活の一瞬一瞬の家族や他の人間関係を課題に、自己教育の教材とすることを通して、相互教育を図ってきた。

本部研修会館の幼児教育部に幼児と共通に通っている母親たちは、本部が休館となるなかで、家族の命と健康を考え試行錯誤をしながら、仲間の力を借り、理事長、理事からの指導、助言を得て、自己を知る作業をしてきた。その一端を報告する。

幼児教育部は、創設者が「自然児を育てる」ことを旨とし発足した。人間形成の基礎となる乳幼児期を、人間関係の原型である母子の密接な繋がりを基に、さまざまな年代層の人々の中で過ごす。また子どもがもつ可能性を引き出すことを育てる側の課題とし、子どもたちは一日の遊びを生み出している。子どもたちのさまざまな行動や大人の側の人間模様を、母親たちは自己教育の課題として捉え、親として、人間としての成長を図っている。

こうした実践を通して、親も子も逞しく

成長してきたが、本部が休館となり、長い休校や分散登校など、一変した学校生活を送る小・中学生の子どもたちも一日中家で過ごすなかで、母親たちにはさまざまな葛藤が出ていた。

五歳と小・中学生の娘がいる責任者のUさんは、家でメンバーとやり取りし、各家庭の状況を事細かに担当理事に繋がっていた。Uさんは、責任者なのだから皆の話を聞き、そのやり取りを本部に報告しなければと、やることに促われていた。理事から「仲間との間で、相手に感じたことをどう自分の課題にするの？身近な仲間との関係で引き出された自分の気持ちと向き合うことを軸に据えることですよ」と指導を受けた。自分の気持ちを探ると、責任者として感じたことは相手に言わなければという思いだけだった。今まで本部に行けば仲間や先輩が声をかけてくれ、また理事長や理事から指導をもらい、自己の課題は何かを知ろうとする向きに意識を切り替えてもらっていたが、今までのようにはいかない条件の中で「自己を知る」ことは難しいと実感した。その気持ちを皆に伝えると「私も家にいると何をどう課題にしたらよいかわからなくなる」、「何かあっても些細なことと思っ流してしまふ」との声があり、本部に繋げながら主体的に自己を知ることが課題にしていこうと話し合った。

Uさんの意識が少しずつ自分に向いてきた時、メンバーのMさんとのやり取りの中でMさんが夫や子どもを自分なりに聞き、相手の状態や思いを深く知ろうとしないと感じた。そのことをMさんに言わせてもらおうと、それが日頃、Mさんから「話を最後まで聞いてくれず、すぐ教えこもうとしてくるのが嫌だ」と言われている自分と重なった。そして「自分の課題はここか」と思った。そのすぐ後、宿題をやっていた次女が「せつかく頑張つてドリルをやっても、間違えたところをすぐにママに怒られる。また怒られるのが怖い」と気持ちを話してくれ、Mさんに言われたことと重なり、娘の気持ちも受け止めず、自分の見たところだけで叱り、傷つけていたのかと、自分をふり返ることができた。それを理事に報告すると「それはよかったわね。そうやって関係の中で自分を知らうとするところが大事なことです」と言われ、Uさんは「自分を知る」とはこういうことなのかと実感し、仲間との関りを続けた。

別のメンバーJさんと話すと、今年三月に幼児教育部を修了した長女が小学校に上がり、登校日に親子で学校へ行くと、家庭での課題としてあやとりが出されたという。Jさんは「幼稚園に通っていた子どもたちはあれもこれもやっていたのだらうな」と思い、娘に「早くできるように

なりなさい」とプレッシャーをかけてしまったとのことだった。Uさんも上の子どもたちが小学校に上がる時同じ思いをし、そのとき理事から「本人の気持ちを大事にすること」と教えてもらい、見守ろうと覚悟を決めると、本人は初めてのことに挑戦する気持ちが出て頑張っていたことを思い出した。理事から「子どもたちは幼児教育部で、自ら考え、主体的に道を切り拓いていくエンジンを育ててもらってきたはずだから本人の気持ちを応援すること。またたくさんの大人から愛情をもらい、人を思う心を肌で感じて育つたことを、親であるあなたが価値として大事に思うこと」と指導を受けたことを伝えると、Jさんは、忙しくて三女のオムツがパンパンになっているのを気づかずにいた時に、長女が黙って替えてくれたことや、お友だちのお父さんやお母さんから「本当にしっかりしていますね」と言われたことを思い出した。そのことから「できる、できない」に捉われる自分たちの心と向き合い、大事な価値とは何かを自分の中に確立することを課題にしようと言った。

昨年から四歳の息子と一歳の娘と共に幼児教育部に通っているOさんからは、次のような報告があった。

Oさんは日頃から栄養面を考え食事を作っているのに、子どもがあまり食べない

とよく怒っていた。ある日息子に「お昼ご飯にホットケーキが食べたい」と言われ、野菜を食べさせたいOさんは「お好み焼きにしよう」と言うと、息子は「イヤだ!」と言って怒りだした。いつもならOさんも「じゃあ、もう作らない!」と怒ってしまっていたが、自分の思いを相手に伝えず、思い通りにならないと怒ることを日頃皆から言ってもらっていたことを思い出した。「いつも教えてもらっているところはここだな」と立ち止まり「野菜も食べてほしいから、お好み焼きにしようと思つたんだよ」と話すと、息子はOさんの目をじっと見て話を真剣に聞いた後「お好み焼きも好きだからいいよ」と言った。こんなことは初めてで、自分の意識次第なのだと思えることができた、とのことだった。

六月に入り、当センターでは活動を段階的に再開し始めたが、緊急事態宣言解除後ひと月が経ち、感染者は増加し、第二波への緊張感が高まっている。新しい生活様式が求められ、ソーシャルディスタンスの確保が感染拡大防止に不可欠であるとされる今、幼児教育部責任者をはじめメンバーたちは、身は距離を置かなければならないが、主体的に意識を繋げ、触れ合う事象すべてを自らの教育課題にし、自己成長を図るこの学びの大事さを感じ取っている。

加速するデジタル化の中で 心の問題を考える

金子理事長は、予てからデジタル時代への移行が人間に与える影響を危惧し、一昨年開催した第十二回生涯教育国際フォーラムにおいても、デジタル時代における人間の主体性の確立が急務であることを投げかけてきた。

今、ソーシャルディスタンスの確保が必須とされるなか、学校現場ではオンライン授業も始まり、デジタル化の勢いが増している。そうした状況のなかで、子どもたちの心の問題が危惧されている。

今号では、本紙バックナンバーから第十二回国際フォーラムの翌月に「生涯教育 未来を繋ぐ教育はどうあったらいいか」のテーマで、金子理事長、木村理事出席のもとに行なわれた青年部「新年のつどい」の記事の一部（本紙四〇八号・二〇一九年二月二十五日発行）を取り上げデジタル時代に生きる青少年たちの今から、大人社会の課題を考えたい。

一月二十日（日）、当センター本部研修館を会場に中学生から社会人まで（スタッフを含む）の十四名が参加し、さまざまな世代が一日を通して全体討議を行った。昼食後には恒例の百人一首を楽しんだ。

はじめに青年部責任者は「金子理事長の年頭のお言葉から、私たちが生きていく時代を認識する大事さを学んだと思います。急激な時代の変化、科学技術が発達するなかで、何が大事な価値かを学んでいることに感謝し、皆で話し合いたいと思います」と挨拶した。

国際フォーラムに参加した高校生のAさんは「今すごく世界が荒れてて国同士が孤立化していると感じていたので、世界の人たちが集まって一つのテーマに基づいて話していくのを聞いてすごく感動しました。

最近、悩みはないけどストレスはあって、中学生のときは悩みを親とか友達に具体的に相談できていたんですけど、今は何を出していいのかわからなくて、いつか爆発してしまうんじゃないかって怖いし、関係ない人に当たってしまうことが多くなってきました」と話すと、理事長は「悩みが自覚にならないということもあるよね。具体的なことから引き出されているモヤモヤでも、成長していくなかで、頭では理解して収まっていると思ってるけれど、釈然としない感覚をたくさん感じると思うの。だけど、それが人間なんだよね。だからその人が原因でなくても当たってしまったということから、じゃあ何が自分の中にあるんだろうと自分を見ていく

ことが大事かもしれないね。逆に誰かが自分に当たってきた場合に『私に何かあるのかな』ということだけではなく、相手には相手の世界があって、自分にはわからないことで悩んでいるかもしれないということを知っていくことが大事だと思う」と助言した。

同じく高校生のBさんは「ストレスとか思っていることをSNSに投稿すると『直接相談に乗るよ』と言ってくれる友だちもいるけど、厭々なのではないかと思ってしまう。かまってるほしいけど、自分の気持ちを話したら離れていってしまうかなとも思ったりして、だったらもう自己満足で撮った動画を載せちゃおうみたいな感じになる。それでまた自分に嘘ついているな、と暗くなって、負のスパイラルにはまっています」と話した。

また大学生のCさんは「私は悩みを解決したいというよりも、ただ聞いてもらい、共感してもらいたいという気持ちの方が強くて、内容によつては相手が親だとそれが満たされないものもあります。そういうのを、SNSに投稿して反応があると、それで悩みが解決するわけではないけど『こういう考えをわかっている』という気持ちは誰かに伝わっているというのは感じられるので、どこかで共感してくれる人がいたら、自分の中で認めるということもあ

るなと思いました。私は来春から看護系の仕事に就くのですが、自分がちゃんとやっ
ていけるか、周りに迷惑をかけないかと
か、あとはやはり命を預かるので責任を感じ
るから不安があります」と発言した。

社会人のDさん(三十代)は「フォーラムの基調講演で、若者が新しい機器に夢中になるのは、人間同士でしか味わえないものを大人も示せていないところがあるというお話が心に残りました。自分が学生の時、皆で何かに向けて頑張ったり、人間同士の関わりですごく気持ちが高揚していたことを思い出し、大人になってからは、能力主義になっていて『これができない、あれができない』ということばかりに気を取られていると思いました」と話した。

また中・高生から日頃の具体的な友人関係、きょうだい、親子関係などの悩みが出された。若い世代からの「インスタ・ストーリー」「ステメ」「リツイート」「リア充」などのワードが年配世代には耳慣れず、二十代、三十代が間に入って意味合いや機能の説明をする場面もあった。同じ言葉を使ったとしても、世代によってその言葉が出てくるベースや感覚がまったく違い、その背景の違いを理解するところから、慎重にじっくり話し合いを深めていった。

そうしたなかでCさんは「悩むのは大事で、どの経験も必要だったという捉え方も

あるけれど、しなくてもいい経験や、そこまで辛い思いをしなくても他で得られた経験もあるのではないかと思う」と発言した。

最後に金子理事長は「私はセンターでいろんな人とお話しさせてもらいます。震災で家を失った人や、フォーラムではパレスチナ支部の報告をエマラさんにしてもらいたいと思っただけで、結果的には来られなかったりと、望まないのに社会的な国の状況のために、さまざまことを強いられるような人生を送っている人がいます。今これだけ便利になっているので、自分で選んで人生を送っているような面もあるけれど、人生は選べないことの方が多いと思うのね。自分に必要か必要じゃないかは別にしても、出会う必然というものが世の中にはあると思います。

木村理事の育った、私の育った時代背景と、皆さんが育っている時代背景とは違います。それは自分で選んでいないのよ。何か意味あってその時代に生を受けているのだと思います。どう自分が前世代の大事にしてきた価値を価値として受け継いでいくのか。親も人間だから、いいところと悪いところを持っています。親からいただいた徳分を本当にありがたいと思える自分になること、そして親に対して批判的に見ている要素も、DNAが同じだから自分も持っているわけで、いいも悪いもあり

のまま見ていくことが大事だと思います。

今、私たちは危機的時代を共に生きています。ですから自分だけが幸せになることとはあり得ない。共に生きていくということ、自分が生きるということはイコールな問題だということを野村生涯教育の理論として創設者は提示してくださり、私たちは学んで人と共に生きられる自分というものをつくらせてもらってきています。自分の命をいただいたルーツに感謝し、そしてこの時代にあつて自分がどういう役割を担っていかれるのか、知ろうとすることが大事だと思います。尊い命をいただいたという意味合いや意義、価値というものが見えてきて、自分を大事に思うことが、実は未来を繋ぐことなんだと思います。自分の悩みも、感じていることも、すごく大事なことから、今後も皆さんが自分の感じたままを出し合って、共感したり反論したり、自分を模索するなかで、大事に思えるようになっていったら世の中が少しずつよくなっていくと思うので、是非そのことを念頭に置いて学びを続けてください」と締め括った。

